
強く支えていきます...いつまでも、あなたの傍らで

godaccel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強く支えていきます…いつまでも、あなたの傍らで

【Nコード】

N0989K

【作者名】

godacccl

【あらすじ】

はやての未来で、リインフォースと出会ったとしたら。

私は主と旅する魔導書。

元の名前は名前を夜天の魔導書。

そして今の名前は、闇の書という。

目の前にいる少女と形容すべき…私の主。

そして、これから永遠という場所に居続ける事になる主。

しかし、主は、なかなか行こうとはしなかった。

ずっと駄々をこねるようにそこに居続けた。

そして、

優しく私の両頬に、

優しく小さな両手を添えてくださった。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る」

そして優しく告げてくださった。

「強く支える者」

それは旅する魔導書としての義務。

「幸運の追い風」

それは夜天の魔導書の意義。

「祝福のメール」

それはデバイスとしての意思。

「リインフォース」

それは、それは、何人もの主を永遠に置き去りにしてきた私の新たな名前。

頬を温かい粒が伝う。

目の前には笑顔を向けていてくれる主。

この主の為に、私は、やっと果たす事の出来る…
最初で最後の責務を果たそう。

ここは……。

私は意識を開いた。

感触を確かめる為に手を握ると、確かな感触がある。
しかし、私の姿は限りなく、透けていた。

そんな事を心配する前に、私は捕らえた。
目の前で泣いている少女を。
それが誰なのか、私には分からなかった。

「どうした？こんなところで」

しかし声を掛けた。

義務とも言える感情で聞いた。

しかし少女は、泣いているばかりで答える様子がない。

どこか怪我をしているのかな？

そう思って、少女の身体を調べていく。

しかし主立った怪我どころか、かすり傷の一つさえ見つからない。

「どうしたんだ、一体…」

アカン……。

そんな声が響いたのはその時だった。

私はどこか胸の奥に浸透するその声を聞いた。

私はもう一度こないかと、耳を澄まして待つ。

アカンのに……。

また響く、どこまでも自分を責めている声が。

うちがそんなこととして良いはずが無いのに…。

悲しい声。

それはどこか自分に似ている声。

誰か…うちを…助けてえな……。

どこまでも立ち止まってしまった少女。

「立つんだ」

だから少々乱暴ではあるが、両脇に手をいれて、無理矢理立ち上

がらせた。

そうしないといけない気がした。
泣いている少女が私に振り向く。
その顔は驚きに染まっていた。

「立てるか？」

今度は優しく聞いた。

泣いている少女はふるふると首を横に振る。
どうやら足が動かないようだ。

「ならばらく一緒にいてやろう」

私は、泣いている少女を支えて歩き出す。

泣いている少女は、微かだが足を動かして前に進もうとしていた。
私は後ろに引こうとする身体を支えて、どこまでも前に進ませた。

少女が、首を回して私の方に向く。

涙はもう出ていなかった。

「立てるか？」

私の何の飾りもない同じ問いに、

少女は小さくだが、確かに頷いた。

私は少女を支えていた手を離して、軽く押してやる。

少女の足が危なげに地面を叩く。

「歩けるか？」

聞くと、振り返らずに頷かれた。

私は苦笑して、しかしすぐに表情を硬くした。
歩いている少女の目の前からおびただしいまでの何かが迫り来ていたのだ。

それは、手、だった。

無数の手。

真つ黒な手。

それらが少女の行く手を阻むばかりか少女を掴もうとしていた。

「つく！間に合え！」

走り出す。

瞬く間に距離を詰めて、少女を追い抜き、目の前の手の壁を肉薄する。

魔法は使えない。

私の魔法は広域魔法がほとんど、それでは少女が危ない。

「走れるか？」

目の前の壁に一発正拳を放ってから、少女の目の前に立って訪ねる。

少女が小さく頷いたのを確認すると、駆ける。

その後を少女が追って来る。

「はぁ！」

気合いと共に一撃。

壁の一部が粉碎して、微かな光がその向こうから差す。
私が先導して、少女がその後を走る。

閉じようとする壁を砕いて、どんどん先に。
少女を連れて。

光が見えた頃、少女に羽が生えていた。
綺麗な黒い三対六枚の羽。
私とおそろいだ。

「飛べるか？」

その問いには、少女は何も答えなかった。
それもそうか、自分が飛べるかどうかなんて分かる訳がない。

私の足が何かに埋まった。
ちよつとした油断だった。
私の足を無数の足が掴んでいた。

私は構わず、少女を抱えて飛翔を始める。
どこまでも高く。
光が差す、あの場所を目指して。

ふと、おなかあたりで、動いている物があった。
少女の羽だ、今にも飛び上がろうと、小さく動いている。

突如、私は空に停止した。
足を掴んでいた手が、固まっている。
私はそれにも構わず、少女を強く投げる。
乱暴だったかもしれないが、そうでもしないと、羽は羽ばたかない。
い。

「飛べ！」

叫んだ。

少女の羽が懸命に羽ばたく。

しかし力が足りない、どんどん高度を下げていく。

その時、少女の身体が大きく上昇した。

私が羽で起こした追い風に乗ったのだ。

だが、私にはまだやるべき事がある、そういう一心で、足の枷を足ごと解いた。

飛翔するだけなら、足は要らない。

手を掴まれた。

その手を放棄した。

逆の手を掴まれた。

その手も放棄した。

少女の身体は確かに飛んでいたが、どこに向かえば良いか分からないかのよう、そこに止まっていた。

そして少女は見た。

光っている人を。

その人にはいろんな部分を失っていたが、それでも少女にここまですべて来いと無言で告げていた。

少女は一生懸命羽ばたいて、その人のもとに向かった。

やがて、強い光が見えた。

その中で、私達は、互いにそれが誰なのかを知った。

「ありがとう、リインフォース」

「主はやて、私はここまでです…いけますか？」

再開を喜ぶ主に、私はただ、問いかけた。
それが何を意味するのか、主はすぐに理解したようだ。
少し顔が歪んでいる。

「正直わからへん…それに、うちはリインフォースと離れたくない
…」

私はそれに対して優しく微笑んだ。
そして、主の間違いを優しく訂正してあげる。

「主はやて、私達はどこまでも一緒です、私の想いが籠もったあなたのリンカーコアが在る限り…」

「……でもうちは！」

「いけます。」

挫けそうなら後ろから支えてあげます。

止まりそうなら後ろから押してさしあげます。

迷いそうなら後ろから行くべき道を指し示してあげます。

だから、前に。

挫けそうでも、前に。

止まりそうでも、前に。

迷ってしまいそうでも、前に進んでください」

私の言葉に、主は少し俯く。

私はその両頬を優しく、両手で包み込んであげる。

そして優しく額にキスをした。

「主はやてには、私の…リインフォースの加護がついています。」

どこまでも進んで行ってください」

主は驚いた顔を見せてから、無邪気な笑顔を浮かべた。
そして、何も言うことなく飛び上がる。

瞬間。

主の身体が大きくなった。
少女から女性へ。
そして、光の中へ消えた。

私もそれを黙って見送った。
そして、重力を取り戻すように落ちていった。

しかし落ちた場所は黒い手の海の中ではない。
黒い海の中で唯一、微かな光を放っている場所だった。

どこまでも冷たく、優しい白銀の雪のような光だった。

(後書き)

説明は今はしません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0989k/>

強く支えていきます...いつまでも、あなたの傍らで

2010年10月14日18時06分発行